鎧ケ崎の亡霊

十二所の軽井沢に古城がある。戦国の世に額田淡路守という者の城であったが、淡路守は浅利氏に攻め滅ぼされた。

浅利氏は難攻不落のこの城を取るために計略をねった。それは只越の峠に兵を集め、たくさんのたいまつを灯して行列をつくり、峠の上から下っては灯を消し、登っては灯をつけて下るという、小人数を数倍の大軍に見せかけ額田軍を驚かし続けた。これを見て額田軍では、城は堅固だが何分守る将兵が小人数のため、この大軍には勝てそうもないと思い込み、生き恥をさらすより自ら命を絶とうと、城の眼下を流れる米代川に、鎧兜のまま飛び込んで命を絶った。その屍が川渕を埋め鎧の山が川底に残されたため、以後、人々はこの渕を「鎧ケ崎」と呼んだ。

その後、城は浅利氏のものとなったが、命を絶った若侍が亡霊となって夜中に町をさまよい、それを見た娘が怨霊に取り付かれ早死したという話や、夜半に馬のいななきと馬蹄の音、金属の触れ合う音が聞え、実際にそんな亡霊の姿を見た、という話も伝わっている。